平成 29 年度新潟県大学生の力を活かした集落活性化事業

新潟県阿賀町室谷地区

「室谷ふるさとキャンプ」の試行実践

ー青年会・高校生・都市部大学生の協働による新たなムラづくりへの挑戦ー

平成 30 年 3 月 26 日

東京農業大学 地域環境科学部 宮林茂幸・杉野卓也
大正大学 地域創生学部 出川真也

＜目次＞

１．はじめに　　・・・・５

２．背景と目的　　・・・・６

３．事業内容　　・・・・８

４．実施経緯　　・・・・10

５．考察と成果　　・・・・16

６．おわりに　　・・・・21

参考資料　　・・・・23

１．はじめに－本事業の概要－

新潟県阿賀町室谷地区は、御神楽岳入口に位置しています。周りを山々に囲まれ、町内でもトップクラスの豪雪地帯で、集落内の紫光山洞雲寺は、この地の教育の源であったと伝えられています。室谷区に暮らす住民の絆は強く、季節ごとの行事など、区全体で協力しあいながら集落の発展と活性化に努力しています。

近年、過疎化高齢化によって集落活動が減退しているといった課題があげられています。山村地域ならではの自然・文化的資源を十分に管理・活用することができておらず、特に次世代の人材育成・継承といった点で大きな懸念材料を抱えています。一方で若手構成員を中心にした青年会活動が今も存続しており、近年新たな地区行事を企画・実施するなど集落活性化に向けた努力を続けています。

地区では、外との交流による青年会活動の活性化を基軸にしながら、地区全体の活性化を図りたい。地域の日常の暮らしの中にある魅力（ひと・もの・こと）を基盤としながら、外部の若者や青年会など地域の若者が中心となった集落活動を促進させたい。若者たちの取り組みを契機にして、地域人材育成と集落の自然・文化資源の保全を実現し、若者たちが暮らし続けていけるような地域ならではの生業を再構築していくことが必要であると考えています。

こうした室谷地区の想いを受けて、平成 28 年度及び平成 29 年度の「新潟県大学生の力を活かした集落活性化事業」を活用した取り組みを大正大学と東京農業大学が連携して実施してきました。取組みの基軸として、室谷地区の若手地域組織である青年会を基軸にしながら、集落全体の活性化を図るために、活用可能な地域資源（ひと・もの・こと）の掘り起こしと活用策の検討を行いました。また、これらの資源を基盤とした人材育成（担い手育成）・交流活動の相乗的活性化策について、大学はもとより高校などの地域教育機関との連携を視野に入れた仕組みづくくりに取組みました。

本報告書では、こうした 2 年間にわたる取組を概説するとともに、特に 29 年度実施活動を中心にしながら、今後の青年会を軸とした若者と地域の活性化のための展望について、取り組み成果と合わせて報告します。

２．背景と目的

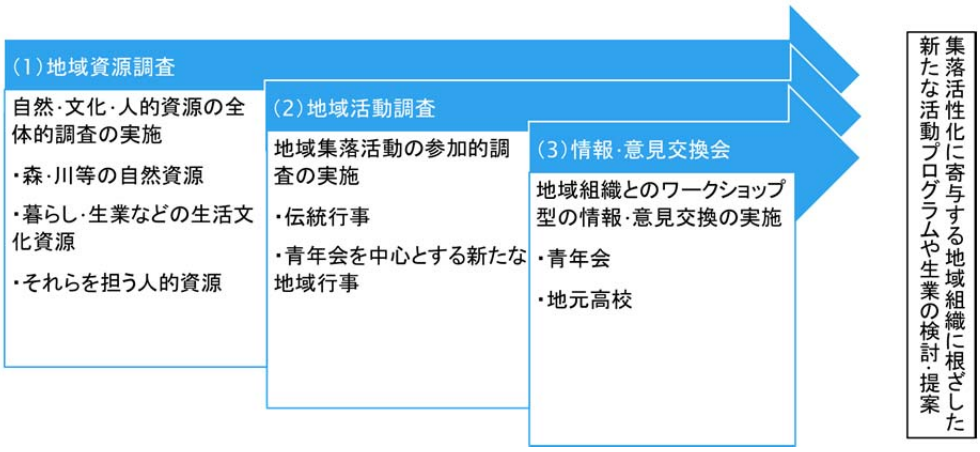
（１）背景－平成 28 年度調査の概要と結果－

平成 28 年度は、青年会の活動に参加しながら、集落の概況を把握し、地域資源の掘り起こしを行うことを中心とした調査活動を実施した。特に次の２点に留意した取り組みを行った。

・青年会がチャレンジ素養としていることに寄り添い、構成メンバーと協働しながら研究調査活動を実施する。

・青年会・若手世代層が軸となって地域活性化に寄与するための集落の自然・文化的資源に根差した新たな活動プログラムや生業を提案する。

実施に際しては、１）地域資源調査、２）地域活動調査、３）意見交換会のプログラムを設定し、段階的に内容を深めながら次年度の活動内容につながる提案を導出させるものとした。



各取組項目の概要は以下のとおり。

１）地域資源調査

地域集落及び周辺環境を住民と共にまわり調べる「地元学」を実施。山林、川、食文化、住まい・暮らし、道具などの地域資源の掘り起こしを行った。

２）地域活動調査

青年会が主宰する集落行事に参加・体験しながら取組の実態を調査した。以下の行事に参加した。

・室谷祭礼伝統行事神輿担ぎ、その後のお楽しみ会開催のお手伝い

・おもっしぇぞ祭り（旧神谷分校学芸会）開催のお手伝い・見学取材・出演

３）意見交換会

関係者と以下のとおり意見交換会を実施した。

・青年会をはじめとする地域住民との情報・意見交換会（計 5 回）

・阿賀黎明高校・黎明学舎との情報交換・意見交換等（計 3 回）

・阿賀黎明高等学校生徒とのワークショップ（1 回）

平成 28 年度の調査研究活動の結果、青年会をはじめ地域組織にはふるさと自然・文化を基盤として様々な学び（森、川、食、暮らし、産業、交流、環境、国際など）を促進する「教育力」が存在することが明らかになった。その一方で、地域資源が未活用であり、これら地域資源を担い手育成・町外若者の誘引のために活用していく新たな方策が求められていることが浮き彫りになった。他方で、青年会をはじめとする室谷区地域団体及び阿賀黎明高校、阿賀黎明学舎において、ふるさと資源を活かした担い手育成、教育プログラムの構築に、ニーズがあると言える。

以上を踏まえて、青年会を軸とした教育・交流産業モデルとして、室谷の資源を活用して高校生と共に行う地域学習プログラム「ふるさと学習キャンプ」（仮称）の試行実践を提案した。

（２）今年度事業の目的と概要

平成 28 年度事業提案を受けて、集落の地域資源活用を図りながら、担い手育成と外部交流を相乗的に促進することを目的に以下の取り組みを行う。

１）前年度事業において提案した、室谷区青年会をコーディネーターとして地域内外の高校生・大学生が協働する地域資源活用学習・実践プログラム「室谷ふるさとづくりキャンプ」を試行する。

２）試行結果を踏まえて、地元若者組織（青年会）・高校生・都市大学生が協働して町の人材育成と活性化に取組むための教育プログラムモデルを構築する。

３）構築したモデルを活用した内 - 外協働の学習・交流産業へと波及展開するための方策を考案する。

以上により、青年会等の地域の若手担い手育成・誘引と交流による地域活性化を相乗的に向上させる地域生業の実現を目指していく。

３．事業内容

（１）集落の概要と課題

新潟県阿賀町室谷地区は人口：115 人、世帯数：29 世帯、高齢化率：35.6%となっている。

青年会をはじめ地域組織に様々な学びを促進する「教育力」が存在する一方、地域資源の中には未活用のものも多く、担い手育成・町外若者の誘引に活用していく新たな方策が求められている。また、町全体でも、地元教育機関において、地域の資源を活かした教育プログラムが模索されている現状がある。

地域の多様な資源を活用しながら、担い手人材育成と外部交流を相乗的に促進させていくことが課題となっている。

（２）調査研究の概要

１）室谷区青年会・地域内外の高校生・大学生が協働する地域資源活用学習・実践プログラム「室谷ふるさとづくりキャンプ」を試行する。

２）　１）を踏まえて青年会・高校生・都市大学生が協働して町の人材育成と活性化に取組むためのサービスラーニング・キャリア教育プログラムモデルを構築する。

３）構築したモデルをふるさと納税制度への活用など、内 - 外協働の学習・交流産業へと波及展開するための方策を考案する。

（３）調査研究の日程

①６月	②８月７～10 日	③９月 7～10 日	④９月 10 日
「室谷ふるさとづくりキャンプ」（自然活用編）の企画調整会議	青年会、地元高校生、大学生の協働による「室谷ふるさとづくりキャンプ」（自然活用編）実施	「室谷ふるさとづくりキャンプ」（伝統文化編）の企画調整会議	伝統文化編として、伝統行事（室谷祭礼）を活用した体験と地域貢献プログラムの試行実践
⑤９月７～10 日	⑥10 月 15 日	⑦10～２月	⑧２月
「室谷ふるさとづくりキャンプ」（交流イベント編）の企画調整会議	交流イベント編として、室谷集落住民と協働したイベント・交流プログラムの試行実践	地域人材育成・交流プログラムモデルの構築検討会	構築モデルを活かした地域づくり波及展開策の検討会･報告書取りまとめ

（４）実施体制・参加学生

１）実施ゼミの概要

①東京農業大学地域環境科学部　宮林ゼミ（地域デザイン学研究室）

「地域の暮らしと文化」を実際に現地に繰り返し赴きながら研究を進める。学校での学びと地域の資源（自然、風景(景観)、建築物、人の暮らし、知恵、ワザ等）を結びつけ、地域の発展、振興とは何か？を探求する。

②多摩川源流大学プロジェクト

「地域で本物を学ぶ」をキーワードに学生が農村に赴き、農業･林業･文化の体験実習をおこなうプロジェクト。実習講師を住民に依頼することで地域人材の活用と実習内容のバリエーションを増やす。また、住民間（世代間）と都市部･地域のコミュニケーションのつなぎ役にも役立つ。

③大正大学地域創生学部　出川ゼミ

「地域創生の教育学」を掲げ、子どもから高齢者まで幅広い年齢層を対象にして地域づくりのための社会教育・生涯学習活動を研究。地域価値の再発見、地域に根ざした教育、学習成果を活用した暮らしや仕事の変革と新たな生業の創出、コミュニティリーダーやコーディネーター人材の育成等。都市との連携協働を見据えながら、農山漁村をフィールドにして研究と実践。

２）参加学生･教員

杉野卓也（東京農業大学学術研究員）

出川真也（大正大学専任講師）

井口春海（東京農業大学２年）

新井　朋（東京農業大学２年）

高橋咲紀（大正大学４年）

本多　龍（大正大学３年）

堤　佐衣（大正大学３年）

福本　麗（大正大学３年）

平良菜月（大正大学２年）

山田瑞貴（大正大学２年）

３）受け入れ集落・団体

新潟県阿賀町室谷地区・室谷青年会、阿賀町役場、阿賀町教育委員会、阿賀黎明高等学校

４．実施経緯

現地訪問による実践活動の実施経緯の詳細は次の通りである。

（１）８月：阿賀町室谷ふるさとづくりキャンプ－自然活用編－

１）趣旨

青年会が軸とした地域担い手育成と町内外の若者交流を相乗的に促進し、新たなプログラム開発や産品開発を実現することを目的に、青年会、地元高校生、都市部大学生（東京農業大学・大正大学）により、地域住民と共に地域資源を用いた学習・実践プログラムを実施します。

・参加者

出川真也（大正大学専任講師）
高橋咲紀（大正大学４年）
堤　佐衣（大正大学３年）
大宮晴香（大正大学３年）
福本　麗（大正大学３年）
山田瑞貴（大正大学２年）
佐藤修子阿賀黎明高等学校教諭
他生徒４名

２）実施内容

①事業目的

・担い手交流（青年会の担い手育成効果）
・地域資源を用いた新たな「プログラム開発」
・地域資源を用いた新たな「産品開発」（食・モノ）

②本活動における実施内容

事業到達目標達成のため青年会・高校生・大学生で次の内容による地域学習キャンプを実施します。

・地域調査（行事・方言・民話民謡／8 日午後、農業・里山・川漁等／9 日早朝）
・郷土料理・創作料理作り検討
・青年会とのイベント企画検討会議

３）全体タイムスケジュール

大学生滞在期間：8 月 7 日 9：30－8 月 10 日 12：00
キャンプ実践（高校生含む）期間：8 月 8～9 日

日時	内容	備考
8月6日（日）		
22：30	池袋駅東口新潟行き高速バス乗り場集合	
23：00	出発	
8月7日（月）		
9：30	大学生　阿賀町着	役場車両（8名乗）
10：30	役場・教育委員会　訪問　あいさつ	
	阿賀黎明高校訪問・打合せ・高校生との交流	
15：00	室谷区へ移動（途中買出し）	役場車両（8名乗）
19：00	青年会との事前打合せ	かやぶきの里泊9名
8月8日（火）		
11：00	阿賀黎明高校集合・移動　４～8名想定	役場車両（8名乗）
	（高校→室谷・かやぶきの里）	
12：00	（キャンプ開始）	
	昼食・かやぶきの里	大学生側で準備
13：00	地域調査	
	室谷区の詳しい方を訪問し、聞き取り・見学	分野ごと詳しい住民を紹介していただき、お宅訪問する
	①行事・歴史等	
	②方言・民話・民謡等	
	③郷土料理・食文化	
	④地形・地質・防災	
	※4グループに分かれて実施。グループ構成1グループ当たり大学生2名・高校生2名・地元案内人1～2名の構成を予定。	
16：00	郷土料理開発検討	
19：00	試食検討会	
	青年会との企画会議	
21：00	1日目終了予定	かやぶきの里泊 14～18名
8月9日（水）		
4：30	野外調査・体験（農作業・川漁等）	
8：00	朝食	
9：00	調査データのとりまとめと振り返り	
11：30	キャンプ終了（高校生移動）	役場車両（8名乗）
昼～午後	大学生　フリータイム（川遊び等）	

夜 8 月 10 日（木） 9：00	青年会と大学生反省会 後片付け後出発 (9：31 津川駅発で帰路)	役場車両（8 名乗）

４）事前準備事項等

①大学側準備事項

・現地活動機材・装備の準備

・地域調査資料の収集と当日調査に向けての検討

②高校生側準備事項

・初日（8 月 7 日）

10：30～関係職員・生徒との打合せ

13：00～高校生との交流会（情報交換会）等の内容準備

・8－9 日のキャンプ当日、先生・高校生含め５名参加

・調査４分野に関する自分の身近な地域の情報収集と取りまとめ（質問様式等提示）

・1 泊 2 日の宿泊準備（着替え、洗面、常備薬、帽子、野外服装等）

③青年会側準備事項

・8 月 7 日午後（13：00～16：00）分野別調査に対応いただける住民

①行事・歴史等に詳しい方

②方言・民話・民謡等に詳しい方

③郷土料理・食文化に詳しい方（16：00～の郷土料理指導にも対応）

④地形・地質・防災に詳しい方

・8 月 8 日早朝（4：30～7：00）野外調査に対応いただける住民

①畑・農業作業・収穫指導等に詳しい方

②川漁に詳しい方

（２）９月：阿賀町室谷ふるさとづくりキャンプ－文化伝統編１－

１）趣旨

青年会が軸とした地域担い手育成と町内外の若者交流を相乗的に促進し、新たなプログラム開発や産品開発を実現することを目的に、青年会、地元高校生、都市部大学生（東京農業大学・大正大学）により、地域住民と共に地域資源を用いた学習・実践プログラムを実施します。

２）前回８月の調査・検討の引継ぎ

①9 月 9 日のお祭行事において、引き続き高校生と絡んだプログラムを企画

内容として、8 月調査で取り上げた地元独自のジャガイモ料理「プッツン芋」（添付ファ

イル参照）を串刺し料理にして、高校生と大学生で販売提供する方向で検討中。

②廃分校舎の利活用について

高校生・佐藤先生ともに関心。地元高校生が行う合宿（勉強合宿、生徒会合宿等があるとのこと）での利活用について検討可能性あり。（地域学プログラムと合わせた地元高校カリキュラムメニューへの発展）

３）日程・場所　９月７日（木）－10 日（日）集合：大宮駅新幹線南口８：30

新潟県阿賀町室谷地区（宿泊先・岩堂かやぶきの里）

４）参加メンバー

・農大側４名

新井　朋（女性）東京農業大学２年

井口晴海（女性）東京農業大学２年

川元愛生（女性）東京農業大学２年

杉野卓也　東京農業大学学術研究員

・大正大学側（５名）

平良菜月（女性）人間科学科２年

高橋咲紀（女性）歴史学科４年

佐藤夏穂（女性）歴史学科３年

本多　龍（男性）臨床心理学科３年

出川真也（窓口教員）大正大学専任講師

５）実施内容

①担い手交流（青年会の担い手育成効果）

集落・青年会行事（室谷祭礼）の参加と貢献

②地域資源を用いた新たな「プログラム開発」

室谷祭礼のお手伝いとお楽しみ会の実施

高校生・青年会とのプログラム企画会議

③地域資源を用いた新たな「産品開発」

（食・モノ）

室谷祭礼における地域食材を用いたイベント実施。高校生・青年会との産品企画会議

６）詳細日程

９月７日（木）

８：30　大宮駅新幹線南口集合

12:32　津川着

14：00　役場打合せ（中間報告内容、来年度以降構想）

15：30　高校打合せ（中間報告内容、分校舎の活用方法、来年度以降構想）

16：30　買出し・移動

入浴・夕食

19：00　青年会打合せ（中間報告内容、役場・高校情報共有、又は祭り準備手伝い）

泊：かやぶきの里（0254-95-2211）

9月8日（金）

AM　プッツン芋　お母さん方と打合せ仕込み準備等

PM　祭準備手伝い等

泊：かやぶきの里

9月9日（土）

AM　祭　神輿担ぎ（男性）、プッツン芋準備（女性）

PM　お楽しみ会　プッツン芋販売実践

夜　　反省会

泊：かやぶきの里

9月10日（日）

AM　ふり返り、片付け、ご挨拶など

昼頃　帰路

12:32　津川発　帰路

（3）10月：阿賀町室谷ふるさとづくりキャンプ－文化伝統編２－

１）趣旨

青年会が軸とした地域担い手育成と町内外の若者交流を相乗的に促進し、新たなプログラム開発や産品開発を実現することを目的に、青年会、地元高校生、都市部大学生（東京農業大学・大正大学）により、地域住民と共に地域資源を用いた学習・実践プログラムを実施します。

２）日程・場所

・10月14日（土）―15日（日）・新潟県阿賀町室谷地区

３）参加メンバー

①東京農業大学

井口晴海（女性）東京農業大学2年

②大正大学

高橋咲紀（女性）歴史学科4年

髙橋佑里（女性）歴史学科4年

本多　龍（男性）臨床心理学科3年

出川真也大正大学専任講師

４）タイムスケジュール

・10月14日（土）

13：00　かやぶきの里着

・いも調達・下ごしらえ・ポップ作り・会場確認等

17：00　入浴（みかぐら荘）

19：00・青年会との打合せ・リハーサル等

・10 月 15 日

終日：おもっしぇぇぞ祭参加・ぷっつん芋提供

17：00　室谷区発・帰路

（4） 2月：地域との意見交換会

1）期間 2018 年 2 月 15 日―18 日

2）参加メンバー

杉野卓也（東京農業大学学術研究員）

出川真也（大正大学専任講師）

高橋咲紀（大正大学 4 年）

本多　龍（大正大学 3 年）

平良菜月（大正大学 2 年）

3）主な取組み内容

（1）青年会との来年度事業企画についての検討

（2）集落住民との交流と青年会企画についての意向調査

（3）役場・高校との情報交換

（4）新潟県事業報告書の策定準備作業

4）行程

2 月 15 日

10:00　阿賀町役場着・総務課・企画打ち合わせ

13:00　阿賀黎明高等学校　意見交流会

夕　室谷区青年会意見交換会・泊

2 月 16 日

9:00 阿賀町役場・新潟青陵大学との意見交換

午後　集落巡検等

夕　室谷区竹会との意見交換

2 月 17 日

午前　除雪ボランティア

午後　住民との交流会

2 月 18 日

午前　除雪ボランティア

13:00　室谷区発・帰路

５．考察と成果

（１）参加学生･生徒の声から

ふるさとキャンプを通じての効果を検討するための参考とするため参加学生･生徒より感想を次の質問項目を設定して収集した。主な回等を以下にあげる。

※質問項目（以下４点に対してお答え下さい）

①何を学んだのか？

②とくに、どのようにそれを学んだのか？

③今回の学習・経験がなぜ重要なのか？どうしてそれが意味のあるものなのか？（重要でない、意味がない、とする場合はその理由）

④どのようにこの学習を活用することができるか？自分自身や自分の学びの質、将来の経験や地域貢献の質を高めるために、学んだことを踏まえてどのような目標設定が可能か？

１）Ａさん

①阿賀町(特に室谷)においての歴史。(遊び、文化、地形、生活等)

②地元のおじいちゃん、おばあちゃん、青年会の皆さんへの聞き取り。

③外部からその地区のことを知るには、実際にその地域に住む様々な世代の方に話を聞くことが重要だと思う。また、今後の活動(ふるさとキャンプ)を充実させていくには、以前調査していなかった、遊びや歴史の部分を知って取り入れて行くことが必要。私個人としても、さらなるコミュニケーション能力の向上を感じることができた。

④自分がこの地域でどのようなことをしたいかという考えを持ちつつ、住民の意見を聞いてさらに考えていくことが必要になる。また、このような調査で培われたコミュニケーションの方法は、将来仕事をしていく上でも活用していくことができる。今後は会話だけではなく、話を聞き出すという部分に重点をおいてコミュニケーションを取れるよう目標をおきたい

２）Ｂさん

①室屋の歴史(訪問させていただいた方の今と昔の生活と歴史)と生活(生活背景や実情)

②実際にお宅に訪問し、お話を聞く。その後聞き込みを行ったメンバーで話し合い。(方言が強いため聞き取れなかったことを再確認するため)また、実際に室屋を歩いたり、体験させてもらう。

③今回の学習が重要である理由は、プログラムを作る上で自ら現状を調査し知ることが大切なのだと再認識できたからである。実際に訪問し話を聞いた際、「昔の話が分かる人は誰もいない。」と若い世代に皮肉(？)を言いつつも、今の青年会の方々のことを、昔と違い気持ちのいい人たちばかりだとべた褒めだった。同じ地元の方々でも世代間での認識の違いが強いように思えた。重要なのは離れた世代同士で知識・意見の交換を行うことであり、新しく地元の魅力を知ることに繋がるのではないか。(まず地元から情報共有をする)

④反省として、私自身どうしたらいいか分からず色んな人に頼ってしまい進んで自らが聞

き出すなどのコミュニケーションを取らなかった。せっかく機会を設けてくださった相手にも失礼だった。また、会話を続けることで新たに発見ができたこともあったかもしれない。今後の自分の成長のためにも、相手の話を聞きながら理解しさらに聞いてみたい点をすぐに見つけ会話を繋いでいくことを目標として設定したい。

３）Ｃさん

①室谷地区についての歴史等について（ダム建設や旧地区についてを中心に）

②地域住民への聞き込みや地区の見学

③都市部についてしかほとんど知らない私にとって農村地域の暮らしについて知る良い機会になった。また、異なる地域や世代との交流をすることによってその人たちの考えについて知ることができた。

④今回の実習で私は何をやればよかったか、実習の意義みたいなものを理解できていなかったのが反省点である。しかし、青年会の人たちや地域の人との交流は自分にとってとてもプラスになるものであった。ただ、今回のように何のためにやっているのか、地域の人は私たちに何を求めているのかきちんと把握して行っていくことが大切であると感じた。

４）Ｄさん

①阿賀町(室谷)の歴史や文化

主に食文化について学んだ。

②室谷地区在住の二人のおばあちゃんに実際の料理を見せてもらいながら、食材の調達の話、いくつかの料理の調理法を学んだ。

③外部の人間が一緒に活動するにはまずその土地のことを知ることが重要だと思う。

その時書物だけでなく実際に人から聞くことで、より身近で分かりやすく、地元の人とも打ち解けることができると考えられる。

④今回の実習で、質問をしようという意識をしたができず、改めて人との対話力・コミュニケーション力が必要だと実感した。中でも相手が言いたいことを理解し聞く力、相手が話しやすいように質問を振る力が重要だと考えた。

こうした学習や調査以外でもコミュニケーション力は非常に有用だ。しかし一朝一夕で身に付くものではないため、意識的に友人同士の会話や家族との会話などを積み重ねて力をつけていきたい。

５）Ｅさん

①阿賀地域の(食)文化、歴史を学んだ。

②主に食文化を学んだ。地域のお年寄りのお宅にお邪魔し、手料理をいただきながら聞き取り調査を行った。料理の材料、調理法、保存方法等を教えていただくことで、その料理が作られた環境的、歴史的な背景をも学んだ。

③今回の学習・経験が重要なのは、その地域の特徴を学ぶことで、他との差異であり魅力を知ることができるからである。

今まで知り得なかった地域独自の発展を目の当たりにすることで、その地域に対する印象

が好意的に変化し、唯一無二のものへとなる。そのことが、新たな学習への意欲へと繋がると考えた。地域の人々も、他の地域からの意見やアイデアを取り入れることが可能になり、相互発展が望める。
④今回の学んだことや疑問点を生かし、更に細かく食、歴史等の学習到達目標を設定し、次回に繋げることができる。今回の研修では、初めてということの甘えがあったと反省した。何も学ぶのかをよく理解できていないまま活動していたことが多かった。その中で、地域の方々の優しさに助けていただいた。コミュニケーションを取ることで精一杯だったので、自ら進んで地域の方々と交流できるようにしなければならないと反省した。学習していく中で、全体的に受け身であったので、個人でも学習到達目標を設定し、与えられた作業だけをこなさないように、広い視野を持っていきたい。阿賀地域との繋がりは築き上げられた信頼関係によってできたものであるので、その繋がりを絶やさない努力を自らしていかねばならないと思った。

６）Ｆさん

人とのかかわり、一つの大きなイベントをやることで一体感が生まれる。別の組織で長となったときに、仲間意識を持つためにつなげていける。

７）Ｇさん

１人と人とのつながり、コミュニティがしっかりしている、お祭や青年会の活動を見ていて感じた。壁を作らないで接してくれる。地域の結束力、コミュニティの強さみたいなものは、あまり見られない光景なので地域というのは都会でもあると思うので結束力というのは重要になり、見習わなければならない。都会でもやっていく意味がある。歴史にあまりかかわるものを見られなかった。テレビ業界を目指しているので、PR 活動などにもつながるのではないか。

８）Ｈさん

地域の活動をしていくのは若い人は重要だと再確認した。今回のお祭やお楽しみ会の中心が青年会にやってできているところから。お祭のはじめにお払いをしたときに神主さんの後継者や代々続けているのか聞いてみたかった。活用はコミュニケーション的なところを、世代別のコミュニケーション的なところでつなげていけるのでは。

９）Ｉさん

学校などで硬い話を聞くよりもおばあちゃんのお話のほうがフランクに聴ける。その地域に根づいた話が聞ける。地域内での話の中に様々な問題がわかる。青年会だけではなく地域の人々のお宅にお邪魔するほうがいいのではないか。いろんなところに積極的に個人で行こうと画策中。人との話し方などを学び、地域を知る。農業関係にためになることが増えた。

10） Ｊさん

結束力がすごいなと思った、子供会で 2,3 歳違いの子とは話すけど、幅広い年代の人たちとかかわれたことがインパクトがあった。見聞を広げるために、知識を深めるために実習に行っているので、さらに深められるのではないかと思った。

11）Ｋさん

人の温かさ、集落に入るとよそ者は排除しようとするのかと思っていたが、受け入れてもらえたのは 2 年間で築いてきたコミュニティがあったから。青年会の人や高校生、地元の先生方と話をしている中で感じた。地域の人たちは、かかわりが濃い、なんで逆に都会の人は近所の人とのかかわりが薄いんだろう。20 代くらいの独身女性はあまりいないのか？進学、就職場所が近くにないのでは？

（２）取組の成果物

本研究により集落活性化のための方策・仕組み構築につながる以下２つの成果を得ることができた。

１）交流プログラムの構築

地域青年会が発案し、自走できる５つのカテゴリの交流プログラム及びそのラインナップが作成された。

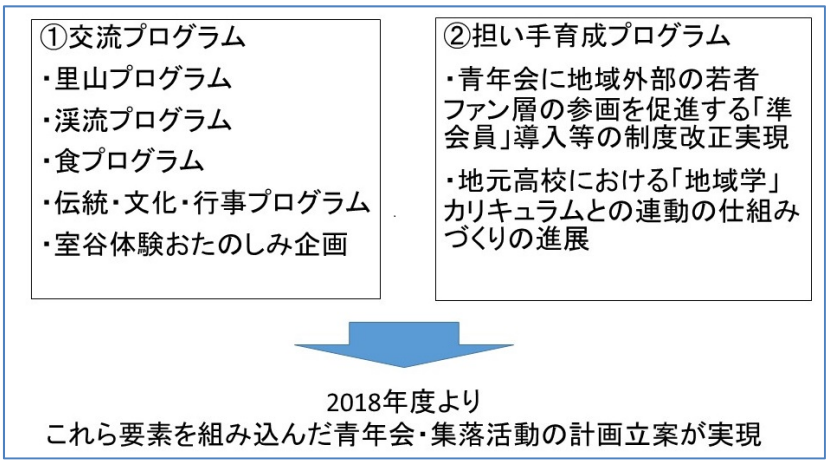
①里山プログラム　②渓流プログラム　③食プログラム　④伝統・文化・行事プログラム　⑤室谷体験おたのしみ企画

・川遊び ・釣り ・魚突き ・秘密基地づくり ・登山 ・登山飯 ・山菜取り ・室谷逃走中 ・【】戦闘中 ・スタンプラリー ・散策 ・室谷駅伝 ・マラソン ・雪合戦（個人団体戦） ・雪だるまコンテスト ・スポーツ雪かき ・花見	・喫茶　カフェ ・方言辞書 ・クイズ ・室谷リポート（YouTuber） ・キャンプ ・公園遊具 ・肝試し ・怪談大会 ・花いっぱい運動 ・室谷カレンダー ・クリスマスツリー ・水切 ・植林植樹 ・名古津　水質調査 ・なめこの駒うち ・自分のはしずくり	・照明ブナ ・アケビ料理開発 ・かんじきづくり、レース ・寺子屋 ・虫取り大会 ・フォトコンテスト ・分校の行事再現

２）担い手育成プログラムの構築

青年会に地域外部の若者ファン層の参画を促進する「準会員」導入等の制度改正が実現した。また、地元高校における「地域学」カリキュラムとの連動の仕組みづくりを進展させている。

以上の要素を組み込んだ青年会・集落活動の計画立案が実現し、2018 年度より実施される予定となっている。

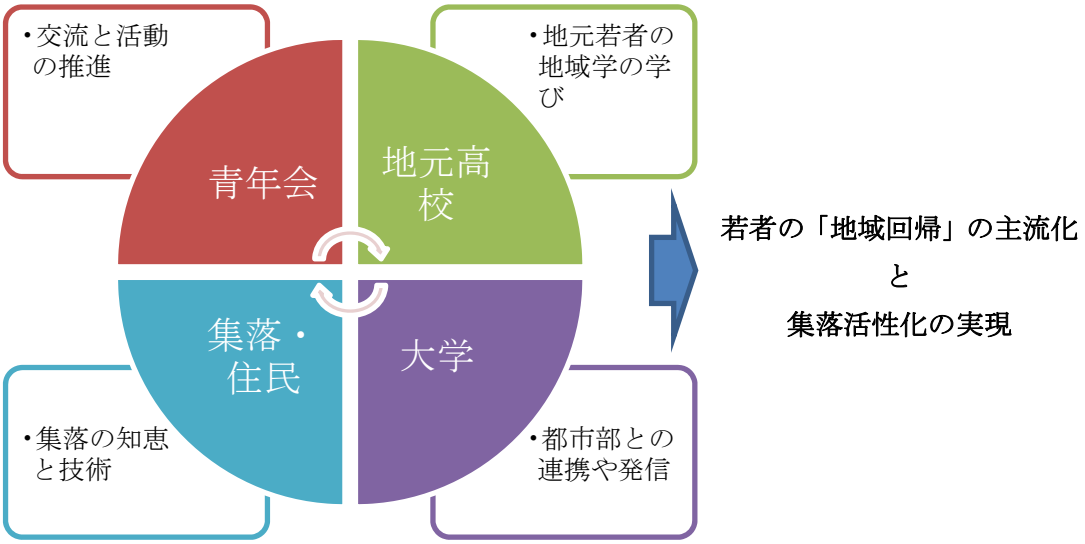


６．おわりに

当研究により、地域青年会が軸となった継続的な交流プログラムや担い手育成に向けた取組体制の構築を図ることができた。今後は、地域資源、特に山村資源を活かした担い手のための生業の構築を行っていくことが求められる。

ある集落の古老がおっしゃるとおり「ここに住むからには山の恵みを利用しなければ、意味がないだろう。私たちはずっとそうしてきたし、だからこそここに住むことの価値がある」といった言葉は重い。

今後はこうした交流プログラムや担い手育成プログラムを活用しながら、引き続き継続的な付き合いを深めつつ、地域集落の担い手が真に地域に根を下ろし生業を立てていくことができる産業作りの構築に向けたチャレンジを共にすすめていきたい。こうした努力こそ若者が求める地域回帰と集落活性化の実現につながるものと考える。



（参考資料類）

中間報告・最終報告のプレゼンテーションスライドを添付する。

「室谷ふるさとキャンプ」の試行実践
―青年会・高校生・大学生の協働による新たなムラづくりの挑戦―

東京農業大学地域環境科学部・大正大学地域創生学部
（阿賀町・室谷区・室谷青年会・阿賀黎明高等学校の有志教員・生徒の皆さん）

１－１　ゼミ紹介

１）東京農業大学地域環境科学部　宮林ゼミ（地域デザイン学研究室）

「地域の暮らしと文化」を実際に現地に繰り返し赴きながら研究を進める。

学校での学びと地域の資源（自然、風景(景観）、建築物、人の暮らし、知恵、ワザ等）を結びつけ、地域の発展、振興とは何か？を探求する。

★多摩川源流大学プロジェクト

「地域で本物を学ぶ」をキーワードに学生が農村に赴き、農業・林業・文化の体験実習をおこなうプロジェクト。

実習講師を住民に依頼することで地域人材の活用と実習内容のバリエーションを増やす。

また、住民間（世代間）と都市部-地域のコミュニケーションのつなぎ役にも役立つ。

１－１　ゼミ紹介

2）大正大学地域創生学部　出川ゼミ

・「地域創生の教育学」を掲げ、子どもから高齢者まで幅広い年齢層を対象にして地域づくりのための社会教育・生涯学習活動を研究

・地域価値の再発見、地域に根ざした教育、学習成果を活用した暮らしや仕事の変革と新たな生業の創出、コミュニティリーダーやコーディネーター人材の育成等

・都市との連携協働を見据えながら、農山漁村をフィールドにして研究と実践

１－２　目的

・青年会がチャレンジしようとしていることに寄り添い、構成メンバーと協働しながら研究調査活動を進める。

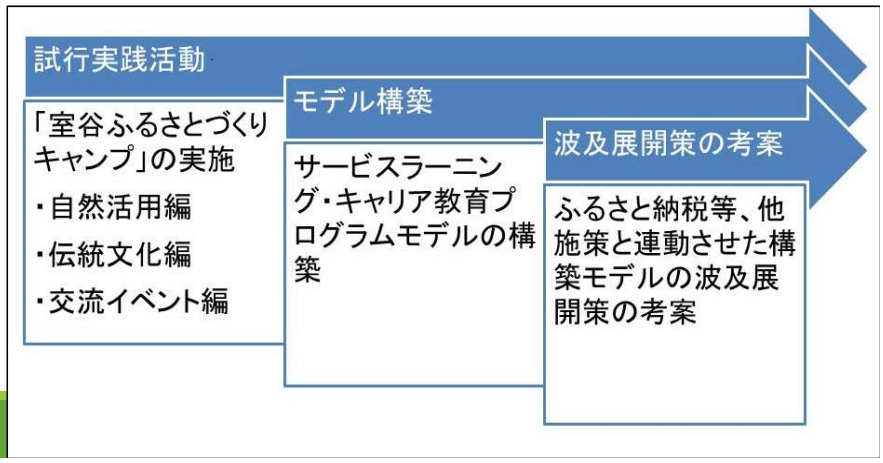
・青年会・若手世代層が軸となって地域活性化に寄与するための集落の自然･文化的資源に根ざした新たな活動プログラムや生業を提案する。

■今年度のテーマ

・昨年度の事業において提案した「室谷ふるさとづくりキャンプ」の試行実践を行う

・試行実践を踏まえて、町の人材育成と活性化に取り組むためのサービスラーニング・キャリア教育プログラムモデルを構築する

・構築したモデルをふるさと納税制度への活用など、内-外協働の学習・交流産業へと波及展開するための方策を考案する。



２－１　阿賀町室谷地区の概要

・人口 115 人
・世帯数 29
・高齢化率 35.6%

　過疎化高齢化に起因する集落活動の減退や地域資源保全管理が課題となっている。
　一方で、集落内の若手世代層（23歳～35歳）を中心に構成される「青年会」による新たな活動展開の萌芽が見られることが注目される。

３－１　昨年度の調査

8月　「地元学」の実施
　　山林、川、食文化、住まい・暮らし、道具などの掘り起こし
9月
10月　青年会が取組んでいる地域活動に参加、取材。
　　室谷祭礼 伝統行事 神輿担ぎ、その後のお楽しみ会の開催のお手伝い
　　おもっしぇぞ祭（旧神谷分校学芸会）：開催の手伝い・見学取材・出演
2月　冬の生活文化を体験、取材
　　阿賀黎明高校へ調査報告

３－２　昨年の調査結果

⑴「教育力」の存在

・地域には教育資源として、豊かな自然資源(森、川、雪、等)や文化資源(食、暮らし、伝統行　事、歴史、等)があり、さらに、青年会をはじめとして、地域に住んでいる室谷についての知識や知恵を持っている方々がいる

⑵青年会の存在

・現在室谷地区には、行事などを積極的に引っ張っていく若者組織「青年会」が存在する。

・調査で分かった資源を青年会が活用していくことによって、さらに室谷での活動の幅が広がってくるのではないか

(3)地元高校の存在

・在校生とは現状では必ずしも地域との接点は多いわけではない。

・しかし、地域の自然・文化など資源を活かした特色ある学習活動を展開しようとしており、地域に対する関心は高い。

３－３　昨年の提案

昨年4度の調査の際、青年会メンバーとの相談を重ねていった結果や、３－２でも述べた地域の「教育力」、青年会をはじめとした住民のニーズを取り入れた結果、青年会を中心として、「室谷ふるさとキャンプ」を行うことを提案

対象者→地域の子どもたち(特に高校生)

内容→昨年、調査で発見された自然資源や文化資源を使って、遊びながら室谷地区の理解を深める

協力→青年会、室谷地区の住民の皆さん、外部大学生

３－４　本年度の活動

青年会・地元高校生とキャンプの内容を試行体験しながら、企画検討する取組を実施する。

「室谷ふるさとキャンプ」の試行実践

・地元高校生（阿賀黎明高校）を対象に室谷で１泊２日のキャンプを実施

・青年会の皆様に歴史、地理、食文化について詳しい地域住民を紹介していただく

・体験（農作業、川遊び等）について案内していただく

・大学生は当日のサポートに回り、地域住民・青年会と高校生の交流や相互理解を促進

・その他、室谷で行われる季節行事に合わせてキャンプを行う

１．地域の伝統的な自然・文化資源と若者（高校生）の接点作り

２．青年会・高校生・大学生・住民の互いの目線の違いを生かした地域資源の新たな活用方策の検討と利用の試行実践

↓

・高校生及び住民の地域価値の気づきと意識
・青年会担い手候補生の創出、交流産業の創出

４－１　本年度活動状況１（８月：ふるさとキャンプ自然文化編）

実施内容

・阿賀黎明高校2年生4名、大正大学生5名が参加。青年会・集落がコーディネートし住民が協力支援

・歴史、地理、食文化の3チームに分かれて地域住民に聞き取り調査

・調査結果をもとに、青年会と情報共有を行う

成果の位置づけ

１．地域内外の若者（青年会・高校生・大学生）が住民と協働して、地域の新たな気づきと価値を創出

２．地域から学んだ成果を生かして、若者と住民達で取り組むことができる具体的なプログラム（サービス・産品）を企画提案・試行実践を行っていく。

↓

・高校生合宿プログラム構想
（高校既存合宿カリキュラムと住民案内の集落散策プログラムのコラボ）
・郷土料理のB級グルメ化とイベントでの試行販売計画

調査前の学習会

食文化チームの様子

ぷっつん芋

地理・歴史チームの様子

調査後のまとめ

廃校舎の見学

４－２　本年度の活動状況２（９月：ふるさとキャンプ伝統文化編）

・室谷祭礼への参加・お手伝い

・祭礼に付随して行われるお楽しみ会での新機軸試行

高校生・大学生が地元女性達の指導の下に開発した「プッツン芋串」（仮称）を試食販売

・秋から冬にかけて内外の若者が住民と共に企画・参画できるプログラムとして、おもっしぇぞ祭・合宿・雪等を生かした企画・試行準備

プッツン芋の追加調査・検討

プッツン芋・試作品づくり

祭りイベント参加・手伝い

祭りイベントにおける試食提供

４－３　考察①

【良い部分】

・青年会、地域住民の方々の「教育力」が十分に発揮されている

・世代間交流がしやすい

【懸念がある部分】

・阿賀黎明高校の生徒は部活入部率１００％、土日キャンプは難しい

・天候に左右される部分がとても大きい

４－３　考察②

【展望】

・高校生や高校引率教員の関心を引くことができた。既存の高校カリキュラムとの連携等の可能性もある（合宿・課外活動等）

・プログラム・産品開発など、プッツン芋に代表されるように、地域内外の若者が一緒になって取組める素材がある。

・時間的・物理的制約を踏まえながら、双方のニーズが高く、一緒に取組める地域資源・要素を中心に「キャンプ」試行実践を積み上げることで、地域の新たな気づきと価値を創出し、担い手候補生をうみだすことができる。

今後の調査・試行の方向性

・引き続き地域資源を活かした内外若者活動の企画提案・試行実践を実施し事業化を検討。

（季節性の要素を入れて、秋の取組、冬の取組を実施する方向で検討中）

→プログラム作りや産品企画検討を通じて、大学生がかかわりながら、地元青年会・高校生・住民との協働活動を生み出し、担い手候補生のモチベーションを挙げていくこと（第1のねらい）。

・今後の事業化に向けた実施体制を考える際、地域内部及び外部とのつなぎ役となる中間支援的機能が重要。求められる働きと位置づけを明らかにして、中長期的な実施体制に組み込む提案を準備。

例：現地自治会・青年会の中間支援機能（集落内の結束やモチベーション創出）

大学など外部の中間支援機能（活動を通じて地域の若者・住民の新たなつながりを創出）

→プログラム・産品開発とその利活用（商品化だけとは限らない。地域イベントでの利用や、地域のファンと成っている都市部側へのPR機能含む）を進めていく上で、地域内外共に上記事項を念頭に意識を持った人材・団体を育成し、巻き込んでいくことが鍵ではないか（第2のねらい）

平成29年度新潟県大学生の力を活かした集落活性化事業

阿賀町室谷地区
「室谷ふるさとキャンプ」の試行実践
ー青年会・高校生・都市部大学生の協働による新たなムラづくりへの挑戦ー

2018年3月22日

東京農業大学宮林研究室・大正大学出川研究室
プレゼンテーター：高橋咲紀・本多　龍

1.集落の概要

- 人口：115人、　世帯数：29世帯、　高齢化率：35.6%
- 集落の紹介：御神楽岳入口に位置する室谷地区。周りを山々に囲まれ、町内でもトップクラスの豪雪地帯で、集落内の紫光山洞雲寺は、この地の教育の源であったと伝えられています。
- 室谷区に暮らす住民の絆は強く、季節ごとの行事など、区全体で協力しあいながら集落の発展と活性化に努力しています。

2. 集落の課題

- 過疎化高齢化によって集落活動が減退している状況にある。そのため、山村地域ならではの自然・文化的資源を十分に管理・活用することができておらず、特に次世代の人材育成・継承といった点で大きな懸念材料を抱えている。
- 一方で若手構成員を中心にした青年会活動が今も存続しており、近年新たな地区行事を企画・実施するなど集落活性化に向けた努力を続けている。

3. 活性化に向けた集落からの要望

- 外との交流により、青年会活動の活性化を基軸にしながら、地区全体の活性化を図りたい。
- 地域の日常の暮らしの中にある魅力（ひと・もの・こと）を基盤としながら、外部の若者や青年会など地域の若者が中心となった集落活動を促進させたい。

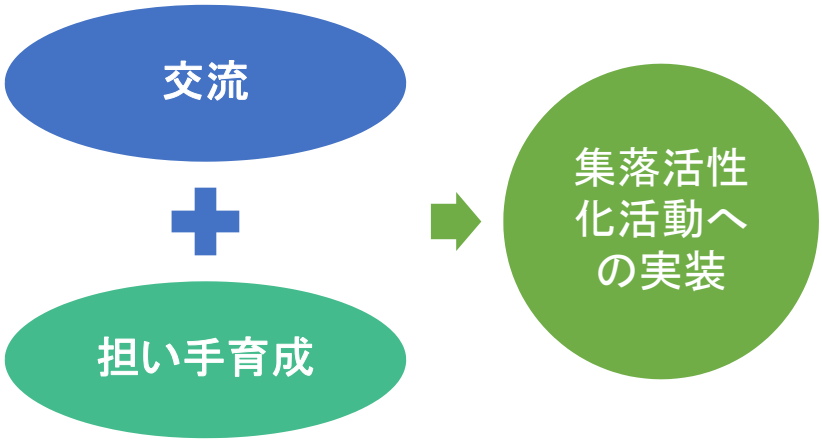
4. 研究の目的

青年会などの若手世代層が基軸に、集落の地域資源の有効活用を図りながら、

①交流活動（交流産業）

②担い手育成活動

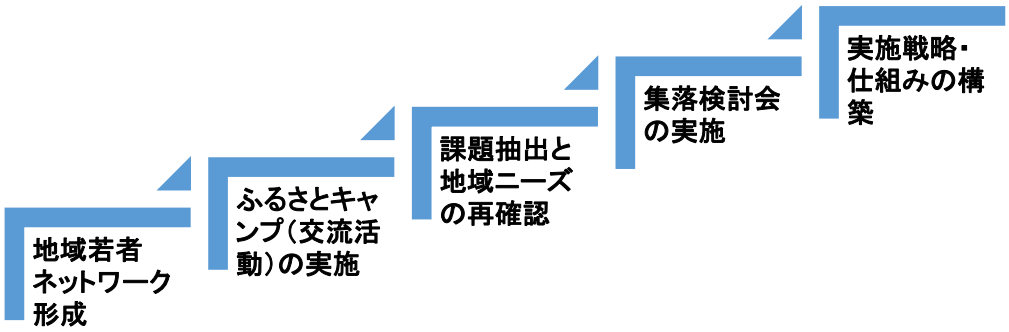
の2活動を相乗的に促進する方策やしくみについて提案し、活性化の取組として集落へ実装する。



5. 研究内容1

概要とプロセス

- 青年会・高校生・大学生協働による地域学習・実践プログラム「室谷ふるさとづくりキャンプ」（若者交流活動）試行を実施。人材育成と学習交流産業の双方が推進される方策を考案。
- 中間報告での指摘事項を踏まえて、地元住民ニーズの確認・検討を再度実施。地域ニーズとして①外部交流、②地域若者担い手育成（直接的には青年会活動の担い手形成）の2点に絞り込み、当地域の自然・文化・人的資源を活用しながら相乗的に実施効果を高めていく戦略について具体的検討を行った。



５．研究内容２

取組１　高校･青年会･大学生による「ふるさとキャンプ活動」の実施

- 室谷青年会、地元高校生、大学生の協同による地域資源学習・実践プログラム「室谷ふるさとづくりキャンプ」を試行実施。
- 地域資源を用いて地域内外の若者が取り組むことができる食産品・体験プログラム等について検討。
- 都市部（豊島区生涯学習施設）でのPR活動と情報交換

５．研究内容３

取組２　「交流」･「担い手育成」を相乗的に実現するための地域資源の再調査と活用検討

- 室谷青年会、地域集落の高齢者の皆さんへのヒアリングと意見交換。
- 源流資源（川・山・食・各種風習・伝統）に地域の若者がアクセスし、「交流」と「担い手育成」が相乗的実現を図るための教育カリキュラム、組織制度、プログラム構築を行った

6. 成果

本研究により集落活性化のための方策・仕組み構築につながる以下の成果を得ることができた。

①交流プログラム

・里山プログラム

・渓流プログラム

・食プログラム

・伝統・文化・行事プログラム

・室谷体験おたのしみ企画

②担い手育成プログラム

・青年会に地域外部の若者ファン層の参画を促進する「準会員」導入等の制度改正実現

・地元高校における「地域学」カリキュラムとの連動の仕組みづくりの進展

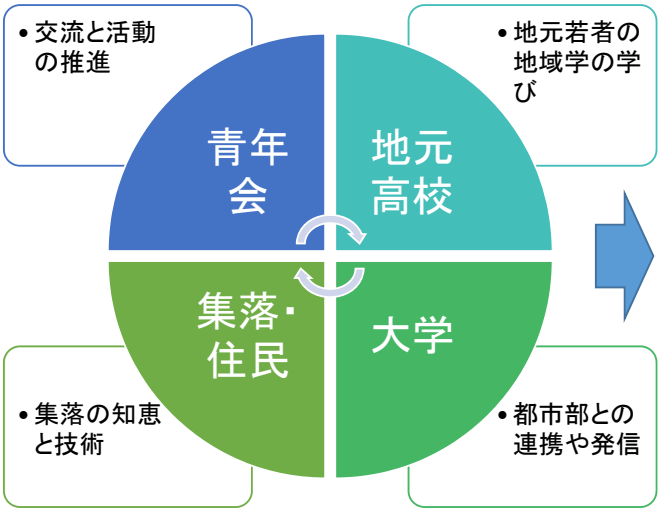
2018年度より
これら要素を組み込んだ青年会・集落活動の計画立案が実現

7. 今後の展望

- 当研究によって開発した交流プログラムと担い手育成プログラムの継続的実施を行うことで、

青年会－集落－地域教育機関（高校）－大学

の継続的かつ効果的連携活動を若者の「地域回帰」の主流化をすすめ、集落活性化を実現する。



若者の「地域回帰」の主流化
と
集落活性化の実現

平成 29 年度新潟県大学生の力を活かした集落活性化事業

新潟県阿賀町室谷地区

「室谷ふるさとキャンプ」の試行実践

－青年会・高校生・都市部大学生の協働による新たなムラづくりへの挑戦－

平成 30 年 3 月 26 日

東京農業大学 地域環境科学部 宮林茂幸・杉野卓也

大正大学 地域創生学部 出川真也